

高等小學
新體讀本

卷五

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 7 9 4 6 a

福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ki44k

明治廿七年十一月八日
文部省檢定済

高等小學
新體讀本
卷五

目次

第一課	櫻	貝原篤信——樂訓	一
第二課	吉野	同上——大和巡覽記	二
第三課	楠正行の御暇乞	太平記	三
第四課	晴雨計		五
第五課	吸皮		八
第六課	世界一周第一		十
第七課	世界一周第二		十五
第八課	米國ノ獨立		二十
第九課	世界一周第三		二十三

第十課	旅行の樂み	貝原篤信——樂訓	二十七
第十一課	世界一周第四		二十八
第十二課	輕氣球		三十二
第十三課	泳氣鐘		三十五
第十四課	孝の大むね	中村暢齋——姫鑑	三十七
第十五課	弘安ノ役		三十八
第十六課	源平の三烈士	室直清——駿臺雜話	四十二
第十七課	八景		四十六
第十八課	左馬助秀俊	湯淺元禎——常山紀談	四十九
第十九課	武田信玄ト上杉謙信		五十

第二十課

女徳

貝原篤信——童子訓

五十三

第廿一課

社會

五十四

第廿二課

社會ニ對スル義務

五十六

高等
小學

新體讀本卷五

第一課 櫻

櫻ノ綻ヒ出デタルコソ、花ニ心ハ無ケレド、人ノ心
ヲ動カシテ、得ナラヌ眺ナレ。是レ我が日ノ本ニテ、
四時ノ花ノ多キ中ニモ、第一ノ見物ナレバ、梅散リテ
後、此ノ比ノ異花ハ皆ケオサレヌ。サレド日頃待タ
セ待タセテ漸ク咲キケルガ、飽クマデ見ル程モ無ク、
疾ク散ルハ又恨メシ。
よゝさらば、

散るまでも見じ、山櫻、

花の盛を面かけにして。」

ト古人ノ咏ミケンモ、後ノ思出ニセントニヤ、情深シ。
此ノ折カラ春雨ノシキ、降レバ、我が宿ノ園ノ櫻
ハ如何ニアラント後ロメダシ。柳緑ニ花紅ニシテ
春ノ色ヲ盡キ出セルハ、イト麗シキ眺ナリ。

春漸ク深クナレバ、風和カニ日暖カニ、百草芳ヲ争
ヒ、群花競ヲ競ヒ、何レノ處カ春ノ無カラシヤ。斯カ
ル景色ニ觸レテハ人ノ心モ浮キ立チテ思フド、揺
イ連子、春ヲ尋チテアツガレアリキ、終日花ヲ眺メ暮

ラスコソ、目ヲ恣ニシ心ヲ快クスル業ナレ。世ノ中
ノイミジク堪シキ事ノ有ルガ中ナル其ノ一ナルベ
シ。

貞原篤信 筆訓

第二課 吉野

凡此の山は、六田の方、麓より奥の院まで百餘町の
間、民家をき所は左右皆櫻の並木なり。又左右の側
なる上の山にも下の谷にも、左右のがけなる所々の
谷にも、皆櫻多し、二月三月は實に花の世界なり。
春は麓より先花咲き初めて、漸く山に咲き登りて

具の院にて終る。麓の花盛より、中の花盛過ぎて、上
の花盛に至るまで、其の間大やう三十日許なり。晚櫻
は麓にも所々に在りて、春の季具の院の花盛の比盛
に開く。初櫻は高き所にあるも早く咲くなり。凡此
の山の櫻は皆一重なり、八重櫻は山中はもとより民
家、僧房にも一株もなし。寒風烈しき年或は風雨久
しく續けるときは、花の容色惡し、故に年に依りて好
否あり。

山僧曰く、「四十年前は、今よりも此の山に櫻多か
りし。」ト。又曰く、「凡此の山の花、上中下一時に開かず

と雖、大やう立春より六十五日に當る比を盛最中と
す。」と。又里人數人に問ふにも皆此くの如く云へり。
但し年の寒暖に由りて遅速あり。是れ町より手前
なる櫻多き處の盛に當る。

吉野の町より少し手前、東の方に山のさし出でた
る所あり。櫻の盛には、此のあたりより左の谷の内、
前より向ひて左右凡方二十町ばかり、只一目に見え
て皆花の林なり、面白きこと譬へて云はん方なし、雪
の曙は只ひた白にてあいだめなし。此の所花の處
々咲き綻びたる粧、浮世の外の物にやと恠まる。

凡概は雲透きに見えたるはあやなし、山の片ほそり又谷底にありて、向に遠き間なき所にあるを見たるがよきなり。此の所は四邊の山の傍、谷の底にあるを高き所より望み見て、譬へば大きな盆などの内を見るやうにこそ侍れ。斯様の目出度き見ものは、倭には云ふに及ばず、恐らくは見ぬ唐にも非じとこそ思へ。

具原富信——大和巡見記。

第三課 楠正行の御暇乞

高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國

中國、東山、東海、二十餘國の勢をぞ向けられける。京勢雲霞の如く、淀、八幡に着きぬと聞えしかば、楠帶刀正行、舍第正時、一族打ち連れて、十二月廿七日、吉野の皇居に参り、四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成、臣弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休め進らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より責め上り候ふ間、危きを見て命を致す處、兼ねて思ひ定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。其の時正行十三歳に罷り成り候ひしを、合戦の場へは伴はで、河内へ歸し、死に残り候

はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し君を御代に即け
進らせよと申し置きて死して候ふ。

「然るに正行正時已に壯年に及び候ひぬ。此の度
我と手を碎き合戦仕り候はずは、且は亡父の申し、
遺言に違ひ、且は武略の云ひ申斐なき誇りに落つべ
く覺え候ふ。有符の身、思ふに任せね習にて、病に犯
され早世仕る事候ひなば、只君の御爲めには不忠の
身と成り、父の爲めには不孝の子と成るべきにて候
ふ間、今度師直、師泰に懸け合はせ、身命を盡くし合戦
仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候ふか、正

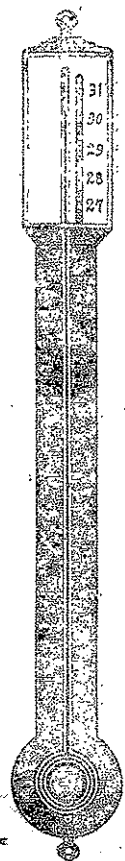
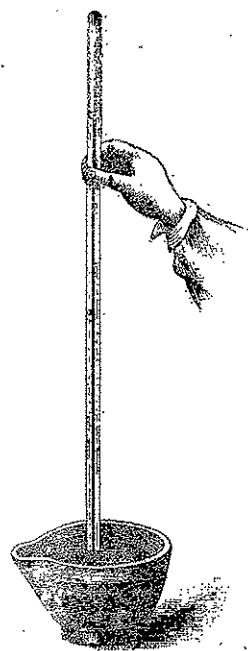
行が首を彼等に取りられ候ふか、其の二つ中に戦の雌
雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏
を拜し奉る爲めに参内仕り候ふ。」と申しも敢へず、涙
を鎧の袖にかけて、義心其の氣色に顯れければ、傳奏
未だ奏せざる先に、先直衣の袖をぞ濡されける。

主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗
しく、諸卒を照臨ありて、正行を近く召して「以前兩度
の戦に勝つことを得て、敵軍に氣を屈せしむ、厭慮先
憤りを慰する條、累代の武功返す々々も神妙なり。
大敵今勢を盡くして向ふなれば、今度の合戦、天下の

安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずる事は、
 勇士の心とする處なれば、今度の合戦手を下すべき
 に非ずと雖、進むべきを知りて進むは時を失はざら
 んが爲めなり、退くべきを見て退くは後を全くせん
 が爲めなり。朕汝を以て股肱とす、慎みて命を全く
 すべし。」と仰せ出されければ、正行頭を地に付けて鬼
 角の勅答に及ばず、只是を最後の参内なりと思ひ定
 めて退出す。

大平記

第四課 晴雨計



一端ヲ閉ヂタル玻璃管ノ長サ三尺許ナルニ、水銀
 ヲ充ツシ、其ノ口ヲ拇ニテ押へ、水銀ヲ盛レル鉢ノ中
 ニ倒シマニ立テ、拇ヲ放ツトキハ、水銀ハ忽チ下リ
 テ高サ二尺五寸
 ニ至リテ止ルベ
 シ。是レ管外ナ
 ル空氣ノ、水銀面
 ヲ壓スルカト、高
 サ二尺五寸ノ水
 銀ノ重力ト、相均シキガ故ニ、空氣ノ壓力此ノ水銀ヲ

支フルナリ。若シ水銀ノ代ニ水ヲ以テセバ、空氣ハ能ク三文餘ノ水ヲ支フヘシ。是レ空氣ノ平常ノ壓力ニシテ、之ヲ一氣壓ト云フ。此ノ水銀ノ高サヲ精密ニ測ルトキハ、二尺五寸零八厘ニシテ、ふらんす尺ノ七百六十ミリめとる、いぎりす尺ノ三十いんちナリ。然ルニ氣壓ハ常ニ一様ナル者ニ非ズ。例ヘバ、或地方俄ニ熱シ、空氣膨脹シテ稀薄ニナレバ、壓力減ジテ七百五十又ハ三十ミリめとるニ下ルコトアリ。或ハ他ノ原因ニ由リテ、氣壓著ク増加スルコトアリ。此ノ氣壓増減ノ變化ハ、右ニ云ヘル管中ノ水銀ノ高

サヲ測リテ知り得ヘシ。此ノ目的ヲ以テ精密ナル度盛ヲナシ、完全ナル器械ニ裝ヒ成シタルヲばろめとる或ハ氣壓計ト云フ。

氣壓ノ増減ハ、天氣ノ善惡ト大イナル關係アリ。大抵ばろめとるノ升ルハ天氣ノ善キ徵候ニシテ、其ノ降ルハ之ニ反ス。就中急ニ降ルハ暴風雨ノ前兆ニシテ、最も恐ルベキ者ナリ。其ノ他升降ノ形狀ニ由リテ晴雨ノ永續スベキヤ、將一時ナルヤ等、種々ノ事情ヲ前知スベシ。故ニ又ばろめとるヲ辨シテ晴雨計或ハ風雨針トモ云フ。

東京ニ中央氣象臺アリテ、毎日全國各地ノ天氣ヲ豫報シ、二十四時間内ノ晴雨ヲ前知セシム。若シ或地方ニ暴風雨ノ至ラントスルヲ知レバ、臨時ニ電報ヲ以テ之ヲ警戒シ、其ノ地ノ港口等ニハ赤球又ハ赤旗等ヲ掲ゲテ以テ船舶ヲ戒ム。商船、漁船是ニ由リテ解纜ヲ見合ハセ、覆没ノ難ヲ免ル、者實ニ多シ。晴雨ハ全國一致スル者ニ非ズ、大抵山海ノ位置、一區域ヲ成シタル部内ニ於テ一致スルナリ。故ニ全國ヲ七區ニ分チテ各區ノ天氣ヲ豫報スルハ、日々ノ新聞紙ニテ諸子ノ見ル所ナラン。其ノ區畫ハ、九州

ノ東半ヨリ四國ノ南半ヲ過ギ、紀州ニ至ルヲ一區トシ、九州ノ東北端ヨリ四國ノ北半、山陽及ヒ畿内ヲ二區トシ、九州ノ西半、對馬、山陰道ヲ三區トシ、東海道ヲ四區トシ、日本海沿岸ノ北半ヲ五區トシ、東山道ノ大平洋沿岸ヲ六區トシ、陸奥及ヒ北海道ヲ七區トセリ。

第五課 吸皮

西洋ノ兒童ガ常ニ游戲ニ用フル吸皮ト云フ物アリ。ソハ半革ヲ裁チテ作レル者ニテ、大キサ六七寸アリ。其ノ中央ニ一孔ヲ穿チ、太キ絲ヲ以テ之ニ通

シ、節ヲ結ビテ脱セザラシメ、水ニ浸スコト數時ノ後、之ヲ平瓦、平石、平板ノ類ニ貼リ、手ヲ以テ上ヨリ壓シテ空隙ナカラシム。其ノ仕方疎ナラザレバ、革ト物ト相粘着シテ離ルハコトナシ。故ニ其ノ絲ヲ引ケバ、平瓦、平板ハ勿論、大石ヲモ引キ舉グルコトヲ得ベシ。

試ニ問フ、此クノ如ク吸皮ノ物ニ粘着スルハ抑、何ノ理ナルカ。皮革濕ヘバ膠藤ノ如キ力ヲ生ジテ物ニ着クトセンカ、是レ誠ニ謂ハレナキ説ナリ。或ハ物ト皮トノ間ニ吸力起ルトセンカ、是レ亦分明ナラ

サル説ナリ。之レヲ要スルニ、吸皮ノ物ニ粘着スルハ畢竟空氣ノ壓力ニ外ナラズ。今其ノ理ヲ語ルベシ。

諸子既ニ前ノ晴雨計ノ話ニ由リテ、空氣ニ壓力アルコトヲ知ラン。今空氣ノ壓力ヲ量ルニ、大約一寸平方ノ面毎ニ廿七斤ノ壓力アリ。然ルニ今吸皮ヲ濕シテ物ニ貼リ付ケ、空隙ナカラシムルトキハ、空氣之二侵入セント欲スルモ其ノ路ナシ。是ノ時絲ヲ引ケバ、皮ノ中央稍起リテ内ニ些少ノ眞空ヲ生ズ、眞空トハ即チ全ク空氣ナキ所ナリ。然ルニ外ニハ、一

寸平方毎ニ廿七斤ノ壓力アリテ吸皮ヲ壓スルガ故ニ、其ノ皮離レントスレドモ離ル、能ハズ、遂ニ吸ヒ着キテ物ヲ引キ上グルニ至ルナリ。

茲ニ最モ奇トスベキ天造ノ吸皮アリ、諸子之ヲ知ルヤ否ヤ。見ヨ、蠅ハ滑澤ナル玻璃窓ヲ走り、又倒シマニ天井ヲ歩ム。是レ何ニ由リテ然ルヲ得ルカ。即チ其ノ脚端ニ細小ノ吸皮ヲ具フルニ由レリ。蓋シ天造ノ吸皮ハ、動物中最モ有用ナル者ニテ、今類ニ於テハ殊ニ缺クヘカラズ。彼ノ拳螺、石決明ノ類ノ海中ノ岩礁ニ附着スルハ、其ノ肉自然ニ吸皮ノ用ヲ



爲スニ由レリ。

又蛸魚、烏賊ノ如キハ、數條ノ長脚アリテ、脚毎ニ數十ノ疣ノ如キ者ヲ具ヘ、以テ吸皮ノ用ヲナセリ。故ニ其ノ物ヲ捕フルヤ、脚ヲ以テ之ヲ抱キ、疣ヲ以テ之ヲ吸フ、其ノ力頗強大ナリ。故ニ蛸魚、烏賊ノ巨大ナル者ニ至リテハ、一脚ヲ以テ

能ク漁舟ヲ覆スコトアリト云フ。

蓋空氣ノ壓力ハ、普ク萬物ニ及シテ漏ス所アルナシ、故ニ人身モ亦其ノ壓力ヲ受クルハ勿論ナリ。今其ノ力ヲ算スルニ、尋常大人ニ在リテハ、凡四萬三千五百八十斤ノ壓力ナリ。然ルニ人々毫モ其ノ重キヲ覺エサルハ何故ゾ。即チ人體中ニモ亦空氣ヲ含ミ居リテ、上下四方ノ壓力相平均スレバナリ。

第六課 世界一周 第一

一年世界一周ヲ思ヒ立チ、折柄夏ノ最中ナリシカ

ト、近キニ亞米利加ヘノ便船アリト聞キケレバ、急ギ荷物ナドヲ用意シツ。其ノ日ニナリテ東京ナル我が家ヲ立チ出デ、家族知友ニ送ラレテ横濱ニ到リ、波止場ニテ人々ト別レ、ヤガテ沖ニカ、レル蒸氣船ニ乗り込ミヌ。

此ノ船ハ亞米利加ノ合衆國ト日本、支那トノ間ニ往來スル飛脚船ナリキ。大海原ヲ渡ル船ナレバ、其ノ構イト大キナリ、舳ヨリ艫マデ四十間計モアリト覺ユ。作りハ三層ニテ、底ニハ荷物ヲ積ミ、中ノ層ニハ下等客ヲ入レ、又荷物ヲモ積メリ、上ノ層ハ中央ニ

上等客ノ室數多アリテ、其ノ前後ヲ甲板トス。艀ノ方ノ甲板ニハ、生キタル牛、羊、豚、雞ナドヲ檻ニ入レテ並ヘタリ、是ハ乘客及ビ艀人ノ食物ニスル爲メナリ。艀ノ方ノ甲板ハ、上等客ノ遊歩場ナリ。上等客ノ室ノ上ニ猶一層アリテ、此ニ艀長ノ室ト楫取ノ楫ヲ取ル所トアリキ。

サテ午後四時ニモヤナリヌラント思フ頃、艀ハ錨ヲ上ゲテ汽笛ヲ鳴ラシツ、動キ出シヌ。今ハトテ、住ミ馴レシ故國ヲ後ニシテ、唯獨知ラヌ異國ニ向ヒ萬里ノ旅路ニ就キケルトキハ、イト心細ク思ハレケ

リ。甲板ニ出デテ舷ニ寄り掛リツ、遠サカリ行ク横濱ノ港ノ景色ヲ見エズナルマデ眺メ居タリシニ、日モ早暮レナントシテ、豆、相、房、總ノ山々モ暮色蒼然トシテ次第々々ニ消エテ行ク、悲シサモ亦一シホナリケリ。

稍アリテ我ノト定メラレタル室ニ入リテ、先其ノ内ノ様ヲ見ルニ、室ノ濶サハ僅ニ三疊敷計ナルニ、舷ヲ小サナル寢臺ニツ重キタルアリテ、室ノ半ヲ塞ギ、殘ル半ニハ盥漱ノ道具ナド置キタル故、荷物ヲ持チ込ミタレバ、坐スベキ餘地ハナカリケリ。

翌日朝トク起キ出デテ、來シ方遙カニ眺ムレバ、我が國ハ早見エズ、見ユル限リハ水ト雲、何レノ方ニモ陸地ハ見エザリケリ。サレド大海原ノ景色イト面白ク、心落々トシテ愉快極リナシ。

然レドモ名ニシ負フ太平洋ヲ横ギリ渡ルコトナレバ、是ヨリ十餘日ノ間、只渺茫タル滄海ノ波ノ上ヲ雲ヨリ出デ、又雲ニ入リツ、走セ行キケレバ、日毎々々ノ同シ景色ニ、目モ倦ミ心モ疲レタリ。偶鯨ノ潮吹タヲ遙カニ見ルコトアリ、或ハ海豚ノ舩ニ驚カサレテ、群レツ、波ノ上ニ飛ビ上がり躍リ出デツ、

逃ゲ行クヲ見ルコトモアリ、或ハあるばとろすト云フ鳥ノ舩ヲ追ヒテ飛ビ來ルコトモアリ。斯カル手ニモ取レザル魚鳥ナレドモ、時ニ取リテハ興ヲ催シ、旅ノ憂苦ヲ慰ムルコト大方ナラザリキ。

舩ハ日本ヲ離レテヨリ、黒潮ノ流レニ隨ヒ次第ニ東北ニ向ヒテ進ミシカバ、寒氣漸ク加リ、十日目頃ニハ、全ク冬ノ氣候トナリテ、雪ニサヘ遇ヒヌ。東京ヲ立ち出ヅルトギハ、夏ノ最中ナリシカバ、衣服ハ總ベテ夏服ヲノミ用意シタリシニツ、此ノ寒冷ニハイトイト困ミシ。然レドモ其ノ後舩ハ更ニ東南ニ向ヒ

テ進ミシカバ、暖氣又漸ク加リキ。

横濱ヲ出デテヨリ早十六日ニモナリヌルニ、陸ハ未ダ見エザリケレバ、倦ミ疲レテ其ノ夜モ早ク寢ヲリシガ、來シ方行ク末ノ思ハレテ、夢現トモナク夜ヲフカシ、曉方ニ至リテヤウノ一寢入リタリシニ、急ガハシク室ノ戸ヲ外ヨリ敲ク者アリケリ。驚キ覺メテ「何ゾ」ト問ヘバ「今コソ陸ハ見エ候ヘ、早ク甲板ニ出デテ見給ヘヤ」ト云フ。嬉シクテ飛ビ起キツ、衣服改メテ甲板ニ至ルニ、多クノ人々モ既ニ出デテ、行ク手ノ方ヲ指サシツ、言リ居タリキ。

眼ヲ凝ラシテヨク視レバ、マダ明ケヤラヌ微雲ノ下ニ、各カニ黒ク山ノ連レル形見エヌ。アレカト計リニテ雲トモ山トモマダ見分ケラレチバ、且信シ且疑ヒツ、暫シ眺メ居タル程ニ、空ハ次第ニ白ミ渡リ、山ノ形漸ク明カニナリテ、疑ハ雲ト共ニ露レタルニ、又海士ノ釣舟ナルカニ二艘、三艘、五艘、六艘ト次第ニ小舟ノ見エシカバ、今ハ陸地ニ近ヅキタルコト疑ナシトテ、小躍シツ、喜ビケリ。

程ナク上陸スベシトテ、室ニ歸リテ荷物ヲ整ヘ朝餐ヲ終ヘテ、ニタビ甲板ニ出デテ、陸地ノ方ヲ見渡セ

ハ、一帯ノ山丘海ニ接シテ連リ、港ハ何處トモ見エサ
レドモ、船ハ仍其ノ方向ヲ變ヘズシテ、山ニ向ヒテ進
ミ行キケリ。イト怪シトハ思ヒナガラ、其ノ有ラン
緑ヲ見ントテ、船ノ山ニ近ヅクヲ待ツ程ニ、ヤガテ山
ト山トノ間ニ狭キ瀬戸ノ見レテ、船ハ此ノ瀬戸ニ進
ミ入りヌ。此ハ是レ名ニシ負フ黄金門ト云フ瀬戸
ナリケリ。

兩岸ノ丘陵ヲ見渡セバ、紅花綠樹ハ絶エテ見エズ、
土石ハ皆暗赭色ヲ帯ビタルニ、何ト云フ灌木ニヤア
ラン、黒ズミタルガ一面ニ生ヒタリケル。丘巖ニハ

又白キ四角ナル家、此處彼處ニ立チタリ。其ノ景色
ハ全ク我が國ニ於テ見ル所ト異ナリケレバ、此ノ時
余ハ竇ニ我が身ノ別天地ニ來レルコトヲ知リタリ
キ。

第七課 世界一周 第二

黄金門ヲ入レバ則チさんふらんしすこノ港ニシ
テ、許多ノ船舶灣内ニ輻湊セリ。船ヨリ遙カニ市街
ヲ見ヤレバ、石造ノ大厦ノ五階七階アルニ、寺院ノ尖
塔打チ混ジテ並ビタリ。其ノ盛大ナルニ驚キツ、

小等
船ヲ見トレテ居タリシ中ニ、船ハ波止場ニ着キヌ。
太平洋一千八百餘里ノ航海ヲ無事ニ終ヘテ、今此ニ
亞米利加大陸ノ地ヲ踏ムコトノ嬉シサヨトテ、急ギ
テ船ヨリ下リ、馬車ヲ雇ヒテ宿屋ニ到リヌ。

さんふらんしすこニテ最モ名高キ宿屋ハばれえ
す、ほてるニシテ、其ノ建築ノ廣大ナル、世界無比ト稱
スルモ宜ナリ。此ノ建物ハ形方ニシテ、其ノ一方ノ
長サハ一町計モアルベク、高サハ窓ノ數ニテ八階マ
デアルコト分明ナリ。内ニハ客室バカリモ七百餘
リアリト云フ。屋内ノ粧飾善美ヲ盡クシ、而シテ旅

客ニ便利ヲ與フヘキ者ハ、一トシテ備ラザルコトナ
シ。客馬車ヲ驅リテ直チニ庭内ニ入り、馬車ヨリ下
レバ、直チニはれべゑとるト名クル小室ニ導カル。
室ニ入りテ坐スレバ、其ノ室直チニ上ノ方へ上リ行
キ二階、三階、七階、八階自由ニ其ノ上ルヘキ所マデ上
リ得ヘシ。余ハ五階ニ在ル一室ヲ偕リタレバ、ソコ
ニテゑれべゑとるヲ出デ、導カレテ客室ニ入りタリ。
室内ニハ大キナル寢臺アリテ、是ニ清潔ナル白布、毛
布ヲ敷キ、又數脚ノ美シキ椅子、溫湯、冷水ヲ引ケル盥
漱具、大キナルがらす鏡ナド備レリ。窓ニハ美シキ



金澤市街景

窓懸窓ノ外ニハ花卉ノ鉢植ニツ三ツ並ベタリキ。余ハさんふらんしすこニ逗留スルコト一週間計其ノ間ニ市中所々ヲ見物シタリ。さんふらんしすこノ街衢ノ中ニテ最モ繁華ナルハ、まあけつと街ト稱スル所ニシテ、大厦高屋相連

リ、人馬ノ往來雜沓ヲ極ム。物賣ル店軒ヲ並ベテ、思ヒ々々ニ飾リ付ケタル美シサヨ。店ノ表ハ最モ大キナルがらすノ板戸ニテ塞ギ、其ノ中ニ賣ルヘキ品物ヲ面白ク並ベタルノミナラズ、店先ノがらす戸ニモ、軒ノ上ニモ、家ノ名、賣物ノ名ヲ金字ニテ太ク書キタルハ、必往來ノ人ノ目ヲ引クベシ。

街路ハ兩側ヲ人道トシ、中央ヲ車馬ノ道トス。人道ニハ平滑ナル板石ヲ敷キ、車馬ノ道ニハ砥石ノ如ク截リタル石ヲ敷キタリ。馬車ノ往來頻繁ナレバ中央ノ道ヲ横切リテ、コナタノ人道ヨリカナタノ人

道ニ移ラントスルニハ、輶ヲ車馬ノトギル、ヲ待タサルヘカラス。然レドモ斯カル所ニ生ヒ立チシ人々ハ、日々ノ事トテ馴レタレバ、走セ行ク車ト車トノ間ヲ己レモ走セナガラ通り腕ケテ、少シモ怖ル、氣色ナシ。

余一日市外ノ公園ニ遊ビシガ、此ノ地ハ元來海ニ近キ所ナレバ、沙地ニシテ草木少ク、見ル影モナキ地ナリシヲ、富國ノ事トテ費用ヲ厭ハズ手ニ手ヲ盡クシ、草木ヲ他ヨリ取り寄セテ數多ノ花壇ヲ造リ、大キナル暖室ヲ設ケナドシテ、美シキ遊園トハナシタル

ナリ。其ノ日ハ殊ニ日曜日ニテ、音樂ノ催ナドアリケレバ、人ノ群集セルコト夥シカリキ。然レドモ此ノ人爲ノ花園ニ人爲ノ音樂ヲ聽キテ歡ブ人ノ心ノ程思ヒヤレテアサマシカリキ。月ノ澄メル夜、獨上野ニ散歩シテ、葉櫻隱レニ郭公ヲ聽クナンドコソ、我ハ中々興アリト思フナレ。

さんふらんしすこニ逗留スルコト一週間餘リニシテ、余ハにう、よるくヲ指シテ出デ立チヌ。抑、さんふらんしすこハ合衆國ノ西海岸ニ在ル港ニシテ、にう、よるくハ其ノ東海岸ニアル港ナレバ、此處ヨリ彼

處ニ行カンニハ、亞米利加大陸一千有餘里ヲ横ギラザルヘカラス。然レドモ幸ニ此ノ大陸ヲ横ギレル鐵道線路幾筋モアレバ、此ノ旅行ハイト便ニシテ且速カナリ。

さんふらんしすコヲ出デ立チテ、船ニテ灣ヲ渡リ、向岸ノおうくらんをト云フ所ニテ汽車ニ乗レバ、是ヨリ七日七夜ガ間走セ行ク車ニ起キ卧シ、ワ、に、りよるくニハ到ルナリ。亞米利加ノ汽車ハ、我が國ノ者ニ比アレバ、其ノ構造大ニシテ且堅固ナリ。上等、中等、下等ナドノ區別ハナクシテ、總ヘテ一様ナレ

ドモ、長旅スル人ノ爲メニ、寢臺車ト云フヲ設ケ、又貧シキ移住人ノ爲メニ、移民車ト云フヲ備ヘタリ。

寢臺車ハ又官殿車ト稱シ、其ノ裝飾甚ダ美シ。晝ハ只坐席ノミナレドモ、夜ニ入レバ、其ノ坐席ヲ變ヘテ卧床ト爲シ、又其ノ上ニ釣床ヲ設ケ、此ノ釣床ハ、晝ハ斜ニ堅ク天井ニ推シ付ケ置クナリ。床ニハ清潔ナル白布モテ包ミタル毛布ヲ敷キ、枕ハ羽毛ヲ入レタル大キナル者ナレバ、走セ行ク車ノ中ニハアレド、卧床ノ様ハ旅宿ニ在ルトサシタル違ヒナシ。寢臺車ニハ喫煙室、盥漱具、大小便所等モ備リ、使丁モ一

人附キ添ヒタレバ、其ノ便利ナルコト云フバカリナシ

汽車ノおうくらんをヲ發セシハ午前三時ナリキト覺ユ。おうくらんをヨリ灣ニ泊ヒテ馳スルコト暫クニシテ、さくらめんと云フ河ヲ打チ渡リ、行ク々々車ノ窓ヨリ外ヲ眺ムレバ、此ノ邊ハ土地低クシテ水澤多シ。水ナキ所ハ牧場トナシテ牛馬ヲ多ク放テリ。夕暮ニかりほるに、州ノ都さくらめんとニ着キヌ。此處ニテ二十分計ノ間車ヲ停メ、人皆下リテ物食ヒヌ。

さくらめんとヲ出デヌレバ、日ハ早入リツ、宵闇ナリ。イツクノ地ヲカ通りケン、車ニ任セテ行ク程ニ、漸クねばたノ山路ニ差シ掛リヌ。

第八課 米國ノ獨立

ころんはすがあめりかヲ發見セシヨリ、え、うろ、つは諸國ノ人民等、新世界ノ富ヲ領セントテ、先ヲ爭ヒテ移住セリ。殊ニ英國ノ人ハ艱難ニ勝テ事業ヲ成スノ氣力ニ富ミタレバ、尤モ困難ナル場所ヲモ憚ラズ、極寒ノ氣候ニ耐ヘ、土人ノ暴虐ヲ凌ギ、怒テ廣大富

饒ノ殖民地ヲ成シヌ。

其ノ後英國ハ屢他國ト戦ヒ、費用多端ニナリ、英國人課賦ノ重キニ堪ヘザリシカバ、殖民地ノ富饒ヲ妬ムノ念漸ク萌シ、遂ニ己レガ負擔ヲ卸シテ之ヲ米國人ニ負ハシメントセリ。

然ルニ米人ハ皆相謂ヒテ曰ク、「英人ハ唯英國ノ稅ヲ議スヘシ、吾等ガ金囊ヲ覬フヘカラズ。吾等ガ艱難辛苦ハ英人豈之ヲ知ランヤ。一タビ不當ノ課賦ニ從ハバ、ニタビ、三タビ遂ニ際限無カルヘシ。」トテ一人モ本國ノ命ヲ奉ズル者無カリケリ。英國政府ハ

此ノ氣色ヲ見テ思ヘタク、此ノ輩命令ヲ以テ服シ難シ、兵力ヲ以テ迫ルヘシト、乃チ軍隊ヲ米國ニ派遣セシカバ、米人ノ怒ハ益甚シク、遂ニほすもんニ於テ兵士ト人民トノ間ニ一場ノ爭鬭ヲ起シケルガ、是ゾあまりか十三州爆裂ノ道火ナリケル。

斯クテ戦争ハ數年ヲ彌レリ。暴威ニ從ハバ饑寒ニ死ナン、暴威ニ逆ハバ砲丸ニ死ナン。見苦シキ饑エ死ニヲセンヨリハ、唯戰場ニ死子ヤ死子ヤトテ、米人ハ死ヲ一致ニ極メ、老イタルモ若キモ萬事ヲ抛テ戰場ニ向ヘリ。兵糧彈藥ハ盡クレドモ、米人ノ氣

カハ盡キズ、刀曲リ槍折レテモ、米人ノ精神ハ曾テ挫
ケズ、衣ハ敵レ靴ハ無ク、跣足ノ血ハ流レテ雪ヲ染ム
レドモ、米人清白ノ氣ハ毫モ汚ヲ受ケズ。

此ノ頃、或老女ノ二人ノ子ヲ持テルガアリケリ。
兄ハ十五、弟ハ十三ニナリケルヲ、今ハトテ軍ニ出サ
ントスルニ、家貧シカリケレバ、唯一挺ノ庖刀ヲバ兄
ニ持タセ、第二ハ錆ビ朽チタル小刀ヲ與ヘケリ。第
ハ稚心ニ「吾モアノ様ナル庖刀ヲ持タバヤ。」ト羨ムヲ
見テ、母ハ涙ヲ流シ、「アハレ、不便ノ者共カナ。汝貧家
ニ成長シ、其ノ庖刀ヲ上無キ者トヤ思フラン。早ク

戦場ニ赴キ、敵ノ大將ト見ルナラバ引ツ組ンデ捻ダ
倒シ、黄金作ノ陣刀ヲ分捕セヨ。」ト諫メ勵マシテ出シ
遣リケリ。此ノ外アハレニ勇マシキ話ゾ猶多カリ
ケル。

誠ニ人ノ一念程畏シキ者ハ無シ、一致ノ力程強キ
者ハ無シ。斯クマデニ凝リ固レル米國人ガ、各、皆一
騎當千ノ勇士ナルニ、其ノ大將軍ハ世界第一ノ英雄
ト兼チテ音ニモ聞キツラン、故ノ智勇兼備ニシテ清
廉潔白ナルあしんどんナリケレバ、えうろつばニ極
威ヲ振ヒシ赤隊モ、襪襪ヲ纏ヘル米國ノ一揆ニ勝ツ

コト能ハズ、日ニ廻ケル銃劍モ、竹槍石礮ニ敵スルコト能ハズ。終ニ萬國ノ公認ヲ得テ、米國ハ英國ノ管轄ヲ脫シ、獨立國タルノ布告ヲナセリ、實ニ西曆一千七百七十六年七月四日ナリキ。告戰八年ノ後、英國モ遂ニ我慢ノ角ヲ折リテ、米國ノ獨立ヲ認可セリ。是ヨリ米國ハ政府ノ法ヲ定メ、國中ノ人選ヲ以テ大統領ヲ戴クコト、爲シ、及ヒ其ノ在職ヲ四年間ト定メタリ。最初ノ大統領ハ即チわしんどんニシテ、四年ノ後再選セラレ、前後八年其ノ職ニ在リテあめりか合衆國萬代ノ基礎ヲ固メタリ。

第九課 世界一周 第三

ねばたノ山ヲ踰ユレバ、是ヨリ行ク手一晝夜が程ハ、亞米利加ノ大沙漠トテイト廣々タル荒野ナリ。樹木人烟ハ跡絶エテ、唯赤ク焼ケタランヤウナル土沙ニ、枯レカ、リタル奇シノ草一面ニ生ヒタルノミ。暑サイト酷シキニ、沙埃ノ起ツコト亦ヨノ常ナラザリシカバ、坐卧共ニイト堪ヘ難カリキ。其ノ夜ノ明クルヲ待チカ子、朝疾ク起キ出デテ行ク手ノ方ヲ見レバ、崩レカ、リタル岩山アリケリ。

程ナク汽車ハ其ノ山ノ峽ヲ通り抜ケテ、山ノカタ
ニ出デヌレバ、意ハズモ右手ニ青海原ヲ見レケル。
車ハ其ノ波打際ヲ走セ行キケレバ、長汀曲浦ノ路ナ
ガラ、アリツル焦土ノ苦ヲ慰メテ、イトモ愉快ヲ覺エ
ケリ。此ノ海ハ大鹹湖ト云ヘル湖水ニシテ、其ノ水
鹹ク、多クノ河流ヲ受ケ容ルレドモ、他ノ洋海ニハ全
ク通ゼズ、自ラ一個獨立ノ水境ヲ爲セル者ナリ。

其ノ日おぐでんニテ車ヲ繼ギ替ヘタリ。此ヨリ
汽車ハ名ニシ負フろつき、い山ノ嶮ニ差シカ、リニ
晝夜ニシテみづぞうり河畔ナルれまはニ到ル。ろ

つき、い山中ノ景色最モ奇ナリ。

曾テ亞米利加大陸ニ蔓延セシ土人ハ赤色人種ニ
シテ、野蠻蒙昧ノ醜類ナルガ、白色人種即チ歐羅巴人
ノ此ノ大陸ニ移住スルコト始リシヨリ以來、次第々
々ニ其ノ土地ヲ白人ニ占領セラレ、今ハ纔ニろつき
い山中及ビ其ノ東西ナル荒野ニ徘徊スルノミ。文
明ノ化ニ歸シテ白人ト共ニ業ヲ執ル者ハ甚ダ少シ。
余ハ此ノホトリノ停車場ニテ、土人ノ男女ヲ見キ。
ろつき、い山ヨリれまはマデハ未墾ノ地多クシテ、
偶、アル所ノ村落ハ、何レモ皆新ナリ。是ニ引キ換ヘ

テ此ヨリ東ハ田畝牧場相連リ、農産最モ豊カナルガ如シ。ねまはヨリ一晝夜計ニシテしかでニ着キヌ。此ハ合衆國中部ノ大都會ニシテ、人家稠密ニ商賣甚ク盛ナリ。地みしがんだ湖ニ臨ミクレバ、湖上ヲ往來スル船舶多クハ此ニ輻湊ス。

しかでヨリにう、よるくへノ鐵道線路ハ幾筋モアリ。其ノ北方ヨリ行ク者ハ、ないやがらノ大瀧ヲ過グ。此ノ瀧ハ、にう、よるく州トかなだノ國ノねんたりね州トノ界にり、い大湖ヨリ出デ來ル流ニ在リ。瀧ノ幅十町計、高サ二十六間餘アリ、水ノ絶エズ落チ

クギリテ水烟ヲ揚グル様、實ニ天下無雙ノ奇觀ナリト云フ。

余ハしかでヨリあしんとん、ひらでるひやヲ經テ、にう、よるくニ到ラント欲セシカバ、道ヲ南方ニ取リキ。しかでヨリ凡一晝夜ニシテあしんとんニ着キヌ。

あしんとんハ合衆國ノ大政府所在ノ地ニシテ、其ノ名ハ初代大統領ノ名ヲ取レルナリ。余ハ一週間計此ノ地ニ逗留シテ、或ハ國會議事堂ヲ觀、或ハ國立博物館ニ行キ、或ハ大統領ノ官邸ヲ訪ヒ、或ハぼとま

つく河ヲ渡リテ、あしんどん將軍ノ古跡ナルベるの
ん山ニ尋テ行キタリ。國會議事堂ノ宏壯ナルコト、
實ニ天下ニ比類ナシ。諸官省ノ建築モ亦甚ク廣大
ナリ。

大統領ノ官宅ハ白金ト稱ヘテ、外部ハ總ヘテ白ク
塗リタル家ナリ。屋内ノ粧飾ハ美シカラサルニハ
アラチドモ、之ヲ他ノ帝王ノ宮殿ニ比ブレバ、甚ク簡
約ナリ。元來大統領ハ人民ノ中ヨリ四年毎ニ撰ビ
舉ゲラル、者ナレバ、白金ニハ定リタル主人ナク、入
ル者アレバ出ヅル者アリテ、新陳代謝屢ナリ。サレ

ハ、年毎ニ咲ク庭ノ薔薇ノ却リテ已レ主人顔ナルコ
ソヲカシケレ。

あしんどん府ニハ觀ルベキ者尚多ク、又至ル所闊
雅ニシテ、其ノ街衢ノ兩側ニハ樹木ヲ植エ並ヘ、辻々
ニハ方形圓形ノ花壇ナドアリテ、イト面白キ所ナリ。
あしんどんヨリ汽車ニテ三時間計行ケバ、ひらで
るひやニ到ル。此ハペンしるばにや州ノ大都會ニ
シテ、人家稠密ナリ。曾テ合衆國ノ首府ナリシカバ、
名所舊跡數多アリ。彼ノ名高キ獨立閣ハ古ク鐵キ
建物ナレドモ、今モ尚存シ、内ニハ多クノ遺物ヲ陳列

セリ、其ノ中ニ自由ノ破鐘ト云フ半鐘アリ。昔獨立ノ布告ヲナシ、トキ、此ノ鐘ヲ撞キテ祝ヒシナリト云フ。此ニ又廣ク美シキ公園アリ。此ノ園ハ人工ヲ加フルコト少クシテ、天然ノ風景ヲ存セリ。折シモ秋ノ末ナリケレバ、落葉堆クシテ栗鼠樹梢ニ遊ビ居タリキ。園ノ中央ヲ横ギレルすかいるきるハ溪深ク水清クシテ、其ノ兩岸ニハ古木林ヲナセリ。

余ハひらでるひやニ逗留スルヨト三日ニシテ、復汽車ニ乘リテにう、よるくニ向ヒヌ。ひらでるひやヲ出デテヨリ僅ニ四時間ニシテ、ちえるせい、しちい

ニ着キ、此ニテ車ヨリ下リ、直チニ船ニテはとそん河ヲ渡リ、向ノ岸ニ上レバ即チにう、よるくナリ。

第十課 旅行の樂み

旅行して他郷に遊び、名勝の地山水の麗しき佳境に臨めば、良心を感じ起し、鄙吝を洗ひ濯ぐ助となれば、是も亦我が徳を進め、知を廣むるよすがなるべし。又云ひ知らぬ異境に往きて、見馴れぬ山川の有様を見て目を遊ばしめ、其の里人に逢ひて其の所の風土を問ひ、或は興まりたる山ふところに岩根踏みて尋

ね入りなぞせば、素より山水の癖ありて「青山夢」に入ること頻なる人は心を留めて歸ることを忘れぬべし。或は海へた山遠き眼界廣き眺は、萬戸侯の富にも勝れり。又其の里に生ひ出でたる名産の異なる品を見て、其の味ひを試みるもいと珍しく、心慰むるざなり。

總べて勝地に遊びて見聞せし事、只一時の耳目を悦ばしむるのみならず、幾年經ぬれど、其の時見聞せし有様、老の後までをり／＼思ひ出でられて、恰其の時見聞せし思をなして樂むべし。是を以て世に目

出たき事を思ヒデと云ふも宜なるかな。

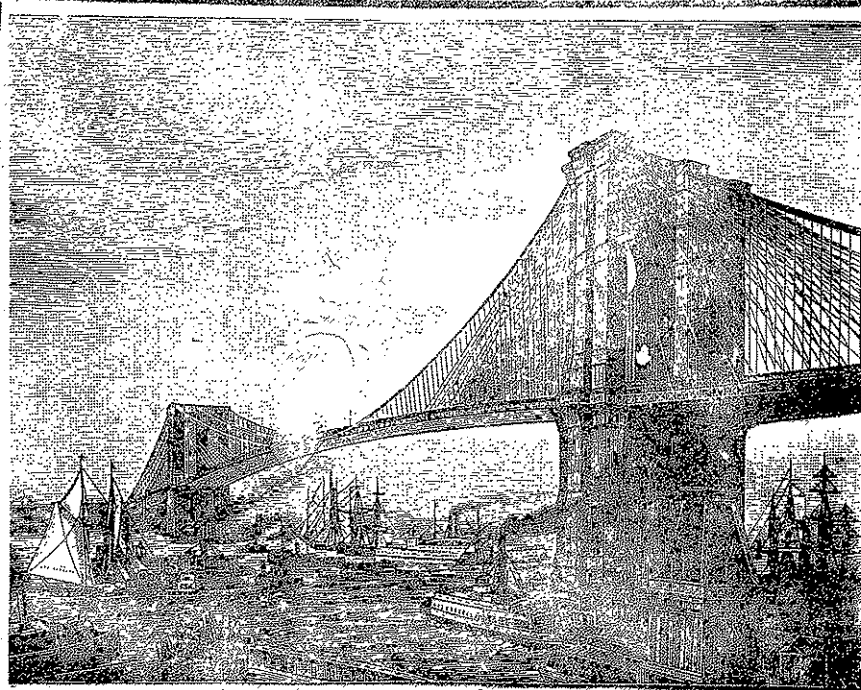
只原篤信一筆

第十一課 世界一周 第四

にう、よるくノ重ナル街ハ、おろ、うを多い(廣巷路)トふ、いふつ、あへにう(第五大路)ナリ。ふ、いふつあへにうニハ富商豪家ノ居宅軒ヲ並べ、おろ、うを多いニハ万種ノ商店兩側ニ並ビ、鐵道馬車ノ往來引キモ切ラズ、尤モ雜沓ヲ極ムル所ナリ。にう、よるくノ富裕ハ第五大路ヲ上リテ知ルベク、にう、よるくノ繁昌ハ廣巷路ヲ下リテ知ルベシ。

余一日ぶろろをゑいテ下リテ下町ニ至リキ。下町トハ市街ノ南部、海ニ近キ部分ノ總稱ニシテ、商業最モ盛ナル所ナリ。此ニ大賈豪商ノ店々相並ビ、毎店荷物ノ出シ入レニ忙ハシク、人道車道ノ往來サナガラ織ルガ如シ。遙カニ下リテ府廳及ビ郵便局アリ。府廳ノ後ニ有名ナル大橋アリ、以テ、よるくとぶる、つくりんノ間ナル東河ニ架レリ。

此ノ橋ハ長サ十六町半餘アリテ、世界最大ノ者ナラン。東河ハ名コソ河ナレ、實ハ海峡ナリ。橋ノ水面ヨリ高キコト二十三間餘ナレバ、汽船ノ通行ヲ妨



グルコトナシ。橋ノ幅ハ十四間餘アリテ、中央ヲ人道トシ、其ノ兩側ヲ馬車道トシ、馬車道ノ外側ニ猶又鐵道アリテ、車ヲ走ラセリ。

兩岸ノ水際ニ二個ノ大塔ヲ立テ、綱鐵ノ針金モテ造リタル直徑一尺五寸餘ノ大綱ヲ此ノ兩

塔ノ間ニ引キ渡シ、此ノ綱ヲ以テ全橋ヲ釣り支ヘタリ。橋ノ兩端ハ、河岸ヨリ遙カニ市内ニ入りテ人家ノ屋上ニ架シタリ。是レ實ニ架空ノ言ニ非ス。之ヲ形容シテ「雨降ラサルニ虹出デ、雲アラサルニ龍現ル。」ト云フモ猶形容ノ及バサルヲ覺ユルナリ。

府廳ヲ過ギテ更ニ四五町南スレバ、終ニふるふるとい盡キテ臺場ト云フ所ニ至ル、是レにう、よるく市街ノ南端ナリ。

にう、よるく市街ノ北部ヲ上町ト云フ。市民ノ住家ハ多ク上町ニ在リ、下町ノ家屋ハ大抵店、役所、仕事

場等ニテ住居ニ非ズ、故ニ商家ノ主人番頭ヨリ丁稚ニ至ルマデ大抵日々上町ヨリ通勤スルナリ。此等ノ人數甚ダ多キガ故ニ、其ノ往來、鐵道馬車、乗合馬車ノミニテハ間ニ合ハズ。因リテ別ニ四條ノ鐵道ヲ市中ニ敷キテ、汽車ヲ走ラセリ。是ハ街路ヲ通ジテ鐵柱ヲ以テ支ヘタル大橋ノ如キ者ヲ架シ、其ノ上ニ鐵道ヲ敷キタルナリ。故ニ街路ヲ通行スル人ハ、其ノ頭上ニ汽車ノ走ルヲ見ルナリ。

上町ニ中央公園ト云フ廣キ公園アリ。園内ニ池アリ、丘アリ、天然ノ風景ニ人エヲ加ヘタルハ見所多

シ。園内又博物館アリ、動物園アリ、投球ノ遊戯ヲナスベキ廣キ平地モアリ。

余にう、よるくニ遊ブコトニ週間計ニシテ、ぼすもんニ向ヒテ出立セリ。汽車ニテ行ケバ八時間ヲ費サズ。路こんねちかつと州ノにうへぶん、ううをあらんを州ノぶろびでんすヲ過グ、何レモ大都會ナリ。にうへぶんニいはるこれにト云ヘル有名ナル大學校アリ。

ぼすもんハまさち、ゆせつと州ノ都ニシテ、且商業ノ盛ナル港ナリ。此ノ都府ハにう、よるくヨリモ古

キ所ニシテ、米國ノ歴史上ニ有名ナル地ナリ。都府ノ中央ニぼすもん、こんもん(共有地)ト稱スル公園アリ、是レ昔始メテ此ノ地ニ植民セシトキヨリ、共有トシテ取り除ケ置キタル地ナリト云フ。園ノ南ニとれもんを街アリ、府中第一ノ繁華ナル街ナリ。又其ノ東北ニびいこん街アリ、地高ク丘ヲナス。此ニ州廳アリ、其ノ屋球形ヲナシ且金ヲ塗レリ、遠ク之ヲ望メバ金色日ニ映シテ觀甚ダ美ナリ。とれもんを街ヲ東ニ行ケバ、市街本部ニ至ル、即チ商業盛ナル地ニシテ、人馬ノ往來雜沓ヲ極ム。

ぼすそんノ東北ニ續キタルち、あれすたうんと云フ所ニ、有名ナルはんかる丘ノ記念塔アリ。此ノ丘今ハ市街ノ内ニ在リテ、人家四方ヲ取り圍ミタレドモ、百有餘年前ニハ人家一モアラザリシカバ、獨立戦争ノ起リシ始、此ニ大戦争アリキ。塔ハ即チ此ノ戦争ノ記念ノ爲メニ建テタル者ナリ。高サ二十二丈餘ニシテ、内ニ階段アリ、登リナガラ其ノ數ヲ數ヘシニ百九十八階アリケリ。頂上ノ室ニ至レバ四方ニ窓アリ、是ヨリ瞰下セバぼすそん全都、港内及ヒ郊外マデ總ヘテ眼下ニ在リ。海ハ蒼ク、山ハ緑ニ煉瓦

ノ家ハ赤ク、我が國ニテハ見ルベカラザル奇觀ナリ。又ぼすそんノ北ニ續キタルかんぶりつちト云フ所ニハ、はあばあを大學トテ米國第一ノ大學校アリ。余ぼすそんニ逗留スルコト一週間計ニシテ、此ヨリいざりす通ヒノ汽船ニ乘リテ大西洋ヲ渡リキ。大西洋ハ冬ハ殊ニ浪荒クシテ、余ガ乘リタル船ハ巨大ナリシモ、甚シク動揺シケレバ、余ハ甲板ニ出ツルコト能ハズ、常ニ室内ニ卧シ居タリ。航海七日ニシテあいるらんをノ南岸ナルくゐんすたうん港ニ着キ、ヤガテ又出發シテ其ノ夜いざりすノりばあぶらる

港ニ着キヌ。

第十二課 輕氣球

玩具ノ風船玉ヲ看ヨ、飄々トシテ空間ニ上レリ、若シ手ニ持ツ絲ヲ放タバ、青空遙カニ飛ビ去リテ遂ニ其ノ形ヲ失フベシ。是レ水素瓦斯トテ、空氣ヨリモ尚輕キ氣ヲ中ニ充タシタレバ、斯ク高ク空中ニ上ルナリ。輕氣球ノ理毫モ之ニ異ナラズ、唯形ニ大小ノ差アルノミ。

元來輕氣球ハ西洋ノ發明ニシテ、其ノ製作ハ帛ヲ

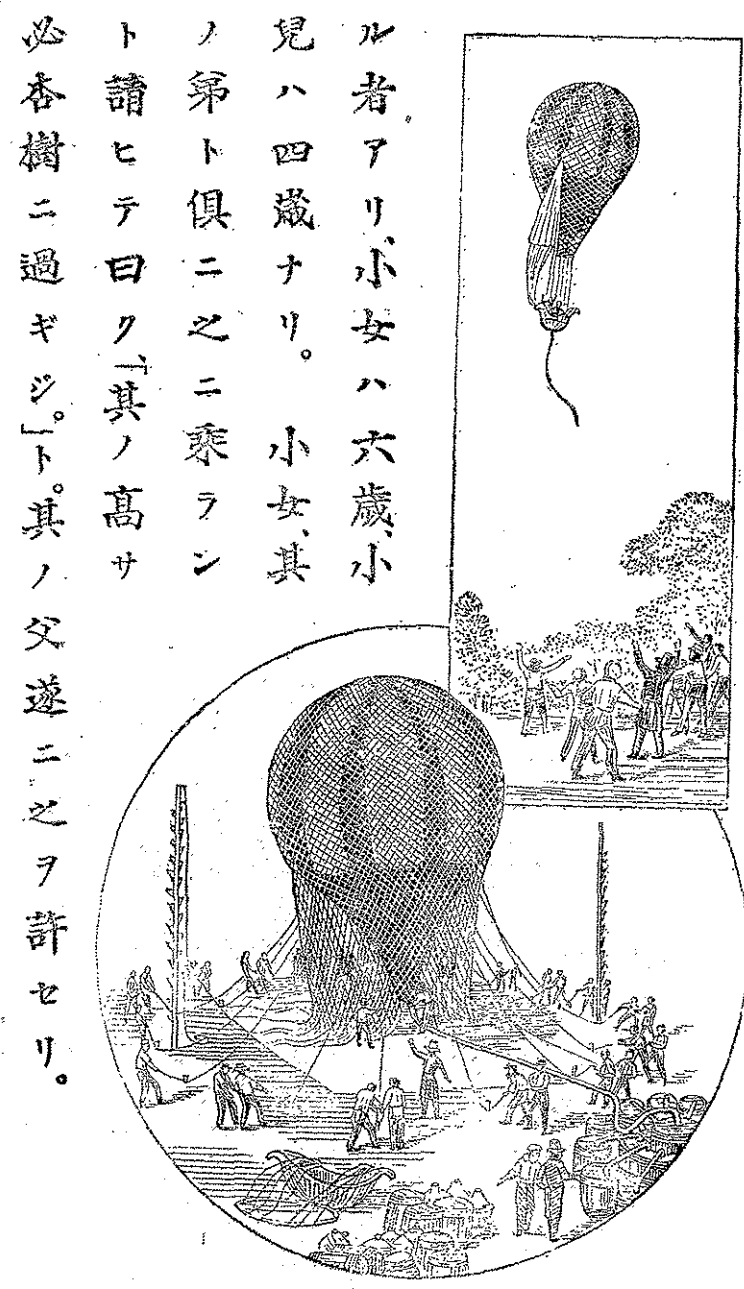
以テ一ノ大囊ヲ作り、形ヲ球ノ如クナラシメ、之ニ膠、
ビムノ類ヲ塗リテ質ヲ緻密ニシ、繩ヲ以テ網ヲ結ビ、
之ヲ球ノ表面ニ被ラセタル者ナリ。又球ノ下ニハ
一ノ大ナル傘ヲ懸ケ、傘ノ下ニハ一ノ簾作ノ船ヲ
懸ク。其ノ大ナル者ハ二三人ヲ載スベク、小ナル者
モ亦一人ヲ載スベシ。船中ニハ晴雨計、寒暖計、望遠
鏡、羅針盤、沙囊等ノ器具ヲ備フ。球ノ頂ト底トニ各
口アリ、機ニ由リテ之ヲ開閉スベクシ、以テ球中ノ氣
ヲ漏ラスノ備トス。

氣球ヲ用ヒントスルトキハ、豫メ槽中ニ貯ヘタル

水素瓦斯ヲ、こむ管ニ由リテ球ニ移シ入レ、數條ノ繩ヲ以テ之ヲ地ニ結ビ止メ、而シテ之ヲ放クントスルトキ、繩ヲ切斷スレバ、球ハ忽チ青空遙ニ昇リ去ルナリ。先年英國人すぺんさあト云ヘル者我が國ニ來リテ、氣球ニ乘リタルコトアリシガ、看ル者ヲシテ覺エズ危險ノ聲ヲ發セシメタリ。

曾テ西洋某ノ國ノ人、此ノ器ヲ携ヘテ城邑ニ至リ、人ヲシテ之ニ乘ラシメ、其ノ賃金ヲ得テ口ヲ糊シタリ。其ノ法、船ノ下ニ長キ繩ヲ設ケ、下端ハ自ラ之ヲ把リ、客ノ意ニ隨ヒテ之ヲ長短スレバ、氣球ハ之ニ從

ヒテ上下セリ。折リカラ小女ト小兒トヲ伴ヒ來レ



ル者アリ、小女ハ六歳、小兒ハ四歳ナリ。小女、其ノ第ト俱ニ之ニ乗ラント請ヒテ曰ク、「其ノ高サ必杏樹ニ過ギジ。」ト。其ノ父遂ニ之ヲ許セリ。

二子既ニ球ニ乘リテ杏樹ノ高サマデ昇リケルガ、
此ノ時繩ヲ把ル人誤リテ手中ヲ寛メシカバ、氣球ハ
忽チ繩ヲ帶ヒ去リ、瞬間ニシテ白雲ノ中ニ入レリ。
二子上天ニ至リ、下ノ人衆ヲ瞰メバ、大厦高樓モ渾ベテ
微塵ノ如シ。二子愕キテ大ニ號泣シ、第ハ父ヲ求メ
テ舩縁ニ臨メバ、舩ハ落チンコトヲ恐レテ之ヲ引キ
止ム。此クノ如クスルコト數時、天氣漸ク冷カニシ
テ饑寒交至ル。此ノ時幸ニ小女ノ懷中ニ一塊ノ麵
包アリケレバ、二子之ヲ食ヒテ僅ニ饑ヲ凌ギキ。既
ニシテ小兒眠ニ就ケバ、夕陽西ニ没シテ、滿天始メテ

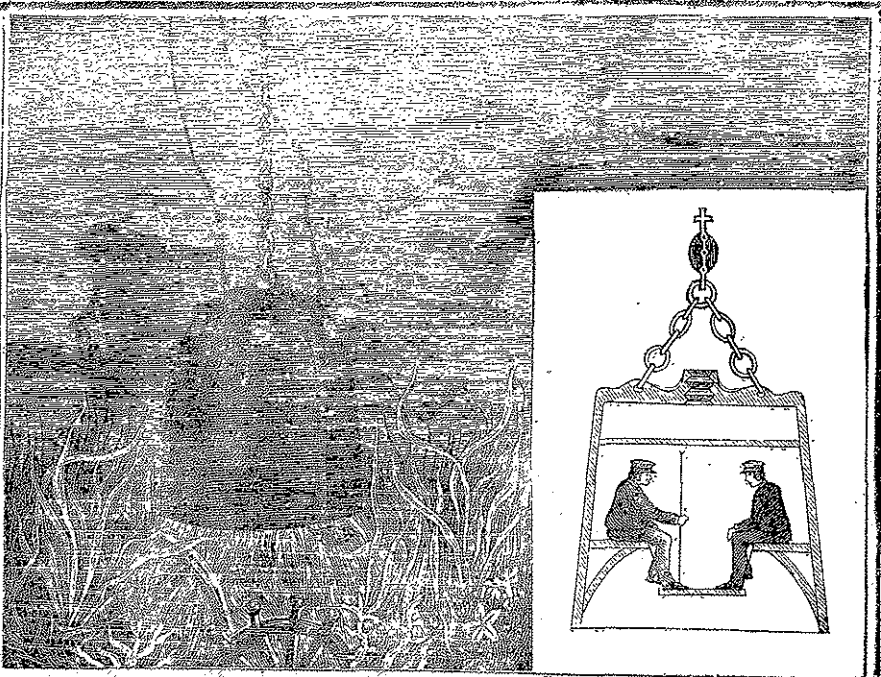
暗黒ニナレリ。是ニ至リテ小女モ覺エズ眠ニ就キ
ヌ。

明朝、曉覺ムレバ、身ハ猶白雲ノ中ニ在リ。小女ハ
悲ミテ下テナントスレドモ、其ノ方ヲ知ルニ由ナシ。
偶、一條ノ繩ノ懸ケテ囊底ニ在ルヲ見、試ニ之ヲ引ケ
バ、活門開キテ内氣是ヨリ漏レ、氣球次第ニ空中ヲ下
リテ、籐舩終ニ一樹ノ梢ニ止リヌ。之ヲ見テ里中ノ
男女走り來リ、舩底ノ繩ヲ把リテ、遂ニ恙ナク二子ヲ
救フコトヲ得タリト云フ。

第十三課

泳氣鐘

珊瑚樹ノ事ハ既ニ大略之ヲ説ケリ。元來珊瑚樹ハ深キ海底ニ生スル者ナレバ、西洋ニテハ之ヲ採ルニ泳氣鐘ヲ用フルコトアリ。泳氣鐘ハ即チ水中ニ在リテ工事ヲ作スノ器ナリ。其ノ形ハ鐘ノ如クニシテ、中ニ凳子ヲ設ケテ工人ノ着坐ニ便ス。鐘ノ上部ニ窓アリ、玻璃ヲ嵌メテ明リヲ通ズ。頂上ニ又二管アリ、此ノ管ハ必ズ以テ製シ、一ハ新鮮ナル空氣ヲ送り、一ハ汚濁ナル空氣ヲ抽ク爲メニ設ケタル者



ニテ、泳氣鐘中最モ緊要ナル部分ナリ。此ノ器ヲ用ヒントスルニ方リ、先工人ヲ鐘内ノ凳上ニ坐セシメ、而シテ後艇上ヨリ徐カニ鐘頂ニ附ケタル鐵纜ヲ放チ下セバ、其ノ器次第ニ水中ニ下ル。既ニ下リテ水底ニ至ルモ、工人ハ毫モ身ヲ濡スコト

ナシ。

諸子之ヲ聞カバ必疑ヒテ曰ハン「泳氣鐘ハ元來底ナキ者ナレバ、少シク水面ヲ下ランニハ、水忽チ侵入シ、沈ミテ深キニ至レバ、鐘内水滿チテ工人必溺レン」。然ルニ決シテ斯カル事アルナシ。然レド、モ其ノ器沈ミテ三十四尺ヲ過グレバ、水漸ク鐘内ニ侵入シ、更ニ沈メバ鐘ノ半ヲ浸スベケレド、鐘内竟ニ水ノ滿ツルコトハナキナリ。其ノ理果シテ如何、左ニ之ヲ説明スベシ。

凡二物時ヲ同ジクシテ一處ニ在ルコト能ハザル

ハ自然ノ通則ナリ、之ヲ名ケテ礙竄性ト云フ。今鐘内ニ空氣滿テリ空氣ハ固ヨリ物ナルガ故ニ水之ヲ侵シテ同時ニ同處ヲ占ムルコト能ハズ。唯空氣ハ彈性アリテ之ヲ壓スレバ縮小スルヲ以テ、水ノ壓迫ノ爲メニ愈下レバ愈縮メラル、ノミ、此ノ理ヲ知ラバ其ノ疑全ク氷解スベシ。

泳氣鐘ノ用タル、嘗ニ珊瑚ヲ採ルノミナラズ、沈没セル船舶ノ貨物ヲ引キ揚げ、海底ノ遺寶ヲ拾ヒ、埠頭橋梁ノ基礎ヲ設クル等、皆之ヲ使用セザルハナシ。

第十四課 孝の大むね

孝經に孝の大むね五つを擧げたり。一つには、事なくであるときも、極めて父母をうやうやしく思ふべし、慈愛に馴れてなめげにあるべからず。二つには、事ありて父母に事ふるときは、極めて喜ばしげにもてなし、少しも心に障ることなかるべし。三つには、父母の病み給ふときに、憂ふる心深く、勞り勤むること怠り無かるべし。四つには、父母の失せ給ふときに、悲む心深く、後のわざ營むこと疎かにすべからず。五つには、父母の亡き靈祭つるときに、偏に深く慎みて世にいますときに異ならず思ふべし。此の五つの事、兼ね備りて、身終るまでに怠り無き者を能く其の親に事ふと謂ふなり。

中村錦聲一編

第十五課 弘安ノ役

今ヲ距ルコト七百年前、支那ノ北方ナル韃靼蒙古ノ地ニ、數多ノ酋長地ヲ分チテ互ニ強大ヲ爭ヒケルガ、鐵木真ト云フ者起リテ是等ノ群雄ヲ征服シ、遂ニ蒙古帝國ヲ建テ、自ラ成吉思汗ト尊號セリ。鐵木真

遂ニ世界征服ノ志ヲ起シ、大軍ヲ率_ヰテ中央あじあヨリろしあ、をいつヲ蹂躪シテ、歐、亞兩洲ヲ震動シ、更ニ歸リテ支那ヲ平定スルノ策ヲ講ジ、事未_レ成ラザルニ死セリ。

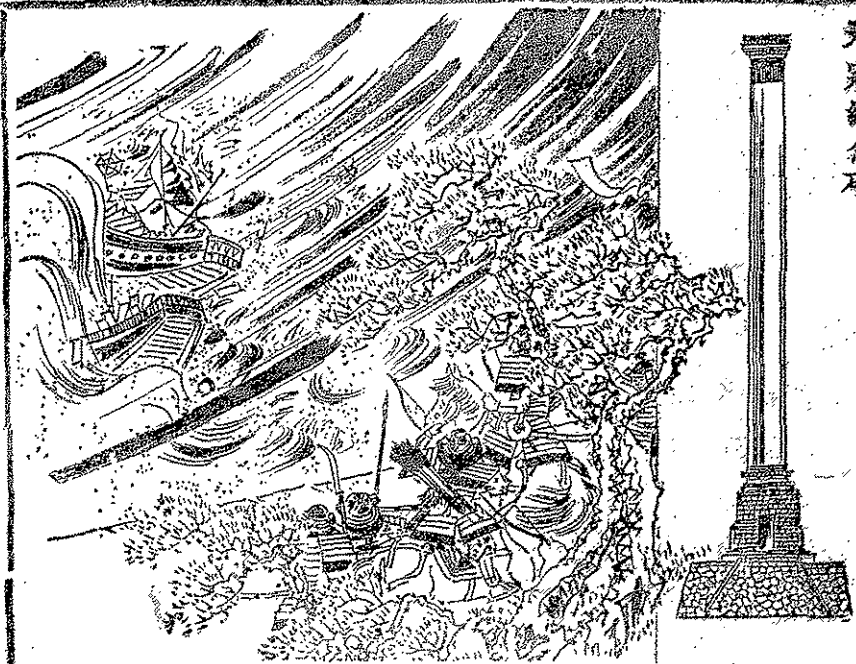
鐵木真ノ孫忽必烈、ニ至リ、遂ニ支那宋朝ヲ滅シテ之ヲ併セ、國號ヲ元ト改メタリ。是ノ時ニ方リテ忽必烈ニ屬スル者、西ハ歐洲東部ヨリ東ハ高麗ニ至リ、全世界其ノ鋒ニ當ル者ナシ。

サレバ忽必烈ハ世界混一ノ心熾ニナリ、先高麗ヲハシテ吾ガ國ニ書ヲ寄セタリ、其ノ趣旨ハ「古ヨリ小

國ノ君、境ヲ大國ニ接スルトキハ、信ヲ通ジ好シミヲ修ムルヲ務トス。況我ガ祖宗天ノ佑ヲ以テ、此ノ大國ヲ保有シ、四方ノ諸國、總ニ懷キ威ニ畏レ、來朝貢聘スル者數フルニ勝ヘズ。而ルヲ貴國未嘗テ一介ノ使節音問ヲ通スルニ及バズ。夫レ親睦修ラザレバ或ハ兵ヲ用フルニ至ラン、是レ豈好ム所ナランヤ。」トサモ傲慢ニ書キタリキ。

時ニ鑑倉將軍ノ執權北條相模守平時宗奮然トシテ其ノ使者ヲ却ケ、諸國ニ號令シテ海岸ノ守備ヲ嚴シクセシメタリ。是ニ於テ忽必烈ハ兵威ヲ以テ迫

元寇紀念碑



ラン爲メ、文永十一年即チ
後宇多天皇御即位ノ年、大
イニ軍ヲ發シテ我が國ニ
寇セリ。我が軍力メ戰フ
ト雖、如何ニセシ元軍ハ東
西諸洲ノ戰ヒテ經テ、弓矢、
火器、軍艦等ノ器械強大便
利ナルコト、總ヘテ吾ガ國
人ノ意表ニ出デケレバ、壹
岐、對馬ノ守將ハ奮ヒ戰ヒ

テ討死シ、元軍ハ勝ニ乘ジテ、筑前ノ宮崎、博多ニ放火
セリ。此ノ夜風雨強クシテ、元ノ軍艦難破スル者多
カリケレバ、一旦本國ニ引キ揚ゲタリ。

翌年忽必烈ハ、又使者ヲ我が國ニ遣ハシタリ。忽
必烈ノ勢ハ世ニ隱レモナシ、其ノ手並ハ昨年ノ戰ニ
テ知ラレヌ。サレバ朝野恐懼シテ謀ノ出ヅル所ヲ
知ラザリケルニ、時宗令シテ使者ヲ熊倉ノ龍口ニ斬
ラシメタリ。

忽必烈大イニ怒リ、元軍、高麗軍合ハセテ十餘萬人
ヲ發シ、范文虎等ヲ大將トシテ、一舉ニ我が國ヲ蹂ミ

碎カントゾ攻メ來リケル。此ノ危急存亡ノ時ニ方
リテ、時宗ハ少シモ驕ガズ、國民舉リテ切り死ニセン
カ、賊軍ヲ塵ニセンカ、ニツニ一ツト決心セリ。

此ノ時、鎌倉ノ命令ニ應ジ、國難ニ殉セントテ馳セ
集リタル諸國ノ勇士等、筑前ノ海岸ニ高ク石壘ヲ築
キ、家々ノ旗ヲ潮風ニ飄シ、敵來レバ拒ミ、敵去レバ小
舟ヲ以テ追ヒ、海陸晝夜ノ戰、凄シキ事トモナリ。賊
ハ例ノ大船ヲ自在ニ進退シ、強大ナル石弓ヲ以テ撃
テ下ロシケレバ、我が船之ニ中ル者、打ち破ラレサル
コトナシ。

然レドモ死ヲ決シタル我が兵ハ、何ヲカ更ニ恐ル
ヘキ、河野通有、同通時等ハ、海ヲ敵ヘル軍艦ノ中ニ眞
一文字ニ乘リ込ミテ、敵ノ船ニ飛ビ移リ、當ルヲ幸ニ
切テ廻リ、大將ヲ擒ニシ船ニ火ヲツケ、徐カニ小舟ヲ
押シ展シケルニ、敵兵之ヲ見ナガラ、氣ヲ奪ハレテ追
ハザリケリ。

之ニ續キテ大友貞親、竹崎季長等、皆小舟ニテ敵船
ニ迫リ、勇ヲ振ヒテ戦ヒケレバ、軍艦モ石弓モ斯カル
時ニハ用ヲナサズ。總大將范文虎ハ、吾ガ兵ノ驍勇
當リ難キヲ見テ已ニ遁レント心構シケル。此ノ役

ハ弘安四年ニシテ、其ノ閏七月一日ニ至リ、俄ニ風荒レ
浪怒リ、サスガノ大船モ木ノ葉ノ如ク吹キ捲クラレテ、覆
ル者數ヲ知ラズ。總大將ノ船ハ風ヨリ先ニ逃レ去リヌ。
吾ガ兵之ニ乗ジテ追ヒ撃チケレバ、敵兵逃グルニ
道ナク、多クハ射伏セ切り伏セラレ、殘ル兵ドモ千餘
人降參シケルヲ許スベキニ非ズトテ皆其ノ首ヲ斬
リ、僅ニ三人ヲ殘シ置キ、還リテ汝ガ主ニ此ノ有様ヲ
告ケヨトテ放チ遣リヌ。怒必烈再ヒ兵ヲ發シテ此
ノ恥ヲ雪ガント怒リケレドモ、其ノ臣下日本人ノ勇
猛ヲ説キテ固ク諒メ止メシトゾ。

賴山陽此ノ事ヲ詠シタル詩ニ曰ク、

筑海颶氣連天黑、	蔽海而來者何賊、
蒙古來來自北、	東西次第期吞食、
嚇得趙家老寡婦、	持此來擬男兒國、
相摸太郎膽如癩、	防海將士人各力、
蒙古來吾不怖、	吾怖關東令如山、
直前斫賊不許顧、	側吾檣登虜艦、
擒虜將吾軍喊、	可恨東風一驅附大濤、
不使羶血盡膏日本刀、	

第十六課 源平の三烈士

渡邊競は、源三位入道頼政が所従の士には第一の者なり。然るに治承年中、頼政、高倉宮を勤めて兵を起せしとき、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、町ち忘れてありけん、競に斯く知らせざりし程に、競暫し猶豫して家に在りしを、平宗盛聞きて、日頃競が魁偉なるを見て、己が所従にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば、請ふべきやうも無かりしに、此の度、競獨都に残りしと聞きて、六波羅に参

れと人して云はせければ参りけり。

宗盛對面して、汝今より我に仕へば入道の恩には勝るべし。とて、小槽毛と云ふ馬に具鞍置き、束替の料とて、遠山と云ふ馬を引き添へ、黒茶おとしの甲冑まで皆具して給ひけり。競畏り給はりて、ほくそ笑みして罷り歸りぬ。

一族家人打ち寄りて、入道殿是程の大事を思ひ立ち給ふに、獨取り殘されしは眞實に遺恨なり。大將の斯く懇に語らひ給ふは辭み難し。『時の花をかざしにせよ。』と云ふこそもあれば、只此の儘にてあれか

し。」と云ふを、競いやとよ、勇士の義さはあらず。」とて、宗盛より給ひたる鎧着て小糟毛に乗り、郎等七騎打ち連れて三井寺へとて打ち出でしが、六波羅の門前を通りしとき、馬に乗りながら門の内へ覗きつゝ、高聲に云ひ入れけるは、「競こそ只今下し賜はりし馬に乗り、三井寺へ罷り越し候へ。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、此の度死を共に致すにて候ふ。御門前を空しく打ち過ぎんは本意なく候へば、御暇を申し候ふ。」とて、三井寺に至り頼政と一所になりしが、其の後宇治橋の合戦に潔く討死して

けり。

彌平兵衛宗清は、平頼盛の士なり。平治の亂に頼朝効少にて頼盛の家に囚れしを、頼盛の母老尼清盛に乞ひて死を救ひけり。其の時宗清、頼朝を朝夕に勞りしが、平家西國へ落ちしとき、頼朝豫ねて頼盛に通問して疎意なき由を云はせける程に、頼盛獨一門に背きて都に留りけり。

其の後平家未だ亡びずして西海に在りしとき、頼朝舊恩を謝せん爲めに頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必召し具せらるべき由を云ひおこされければ、

頼盛關東へ赴くとて、宗清に「いざ連れて下らん」と云ひしに、宗清云ひけるは、「頼朝某に下れ」と候ふは、定めて昔のなほみを思ひ出でて、所領引出物をとじて、其のかみ扶助せし勞を報せんとの事にてあるべく候ふ。今更源氏に詣ひて、其の蔭に寄り候はんは、西海に在る朋友共の承る所も口惜しくこそ候へ。君は斯くて都に御安堵しおはしまし候へとも、御一門は何れも西海に流落し給ひ、日夜安き御心もあるまじく候ふ。此にて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候ひて、頼朝某が事を尋ねられ候はば、

折節勞る事ある由を仰せられて給はり候へ。」とて鎌倉へは行かざりけり。其の後西海へ下りけるにや、其の終を知らず。

伊藤祐清は、伊藤祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫の時祐親に候りておはせしが、祐親禁衛の役に當りて京師に赴きし間に、祐親が女に一男を産ます。祐親京師より歸りて後、之を聞きて大いに怒りて、其の男を殺しけり。頼朝をも害せんとするを、祐清悲み、頼朝を深く愛護し、密に逃れ去らしむ。其の後頼朝兵を起して伊豆より相換へ赴きしとき、祐親平家

の御方として大庭景親等と石橋山に至りて頼朝を追ひ襲ひけり。

其の後頼朝既に東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られしとき、祐親を生け捕りて至りしを、其の罪を決するまで祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召し出して勸賞を行はれんとありしに、祐清「只御恩には早く教され候へ、父囚れ其の子勸賞せらるゝ法や候ふ、若し我を教し給はずは平家に歸すべし」と云ふに、「されはさて我を教ひし者を教すべきやうなし」とて赦して放ち遣りけり。祐清其れより直に

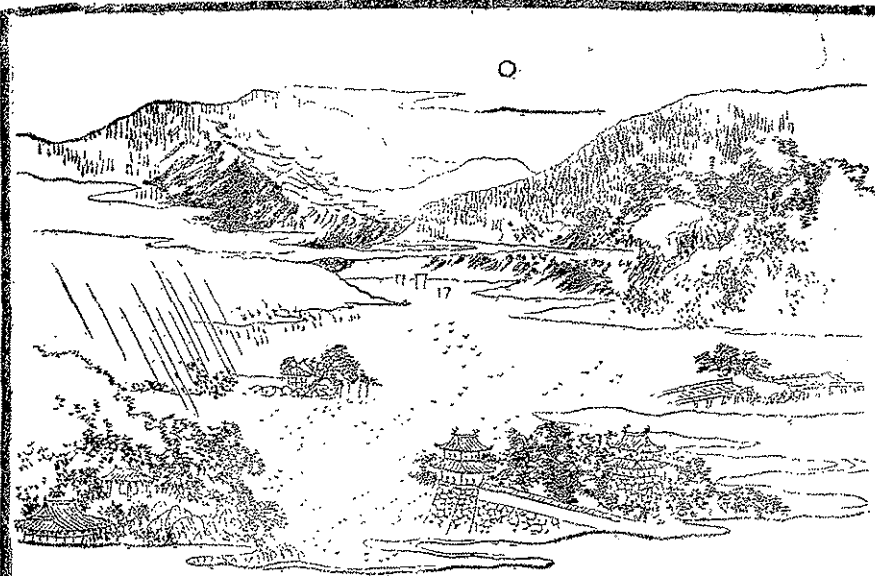
京師に奔りて平家に屬し、後篠原の合戦に遂に討死を遂げけり。

此の三人時代も大方同じく、志節も相似たり。其の清風高義、源平の間に求むるに其の類ひ少く覺ゆ。

室直清一級受給

第十七課 八景

支那ニ洞庭湖トテ名高キ湖水アリ。其ノ周圍ニハ多クノ名所アリテ、風景甚ク好シ。就中古ヨリ人口ニ膾炙セルハ瀟湘八景ニシテ、所謂瀟湘ノ夜雨、江天ノ暮雪、洞庭ノ秋月、遠寺ノ晚鐘、平沙ノ落雁、遠浦ノ



歸帆、山市ノ晴嵐、漁村ノ夕照是ナリ。

我が國好事ノ人之ニ徴
近ヒテ琵琶湖邊ノ名勝ニ近
江八景ノ名ヲ命セリ。即
八千唐崎ノ夜雨、比良ノ暮雪、
石山ノ秋月、三井ノ曉鐘、堅
田ノ落雁、矢橋ノ歸帆、粟津
ノ晴嵐、勢多ノ夕照是ナリ。
京都ヲ遊覽スル人ハ皆道

ヲ北ニ枉ゲテ或ハ杖ヲ湖邊ニ曳キ、或ハ舩ヲ湖心ニ
浮ブ。汽車ニ乘リテ急ギ過グルモ軌道ハ宇治川ノ
落口ニ當リ、勢多ノ長橋ハ鐵路ノ南ニ隣リ、比良ノ高
根ハ湖水ヲ隔テ、遠ク西北ニ峙チ、其ノ他三井寺ニ
壁ノ白々ト見ユルナド、恰モ畫ノ中ヲ過グル心地ツ
スル。

諸國又到ル處ハ景ノ撰ヒアリ。京ノ東山八景及
ヒ播磨八景ハ、已ニ琴歌ニ詠セラレ、東國ニハ武藏ノ
金澤八景、下野ノ日光八景等最モ有名ナリ。サレバ
僻地寒村ニ至リテモ、風流好事ノ人ハ、丘陵田園ノ眺

望ヲ見立テ、ハ景ノ名ヲ負ハシメ、或ハ之ガ景色ヲ
畫キ、或ハ之ヲ詩歌ニ詠シ、神社寺院ニ掲グル者往々
アリ。諸子散步ノ序ニ近傍ノ風景ヲ見立テ、其ノ地
ノハ景ヲ撰ビテ相共ニ品評センハ、亦心ヲ樂マシム
ルノ一事ナルベシ。

余ハ今琴歌撫磨ハ景ノ一節ヲ左ニ示サン。

今日を門出の旅の空、

うかる、聲も撫磨なる

名をころどころ尋ねれば、

心ときめく眺かな。

賤の童に事問へば

己れを名のる杜鵑

飛び行く方は高濱の

晴る、嵐に誘はれて

飾磨に歸る帆はちらちらと、

夕照斜に高砂の

松は千歳の色なほ深く、

引く人多き手栢山、

落つる雁たつ鷺山に

翼まじふる其の数は、

三五夜中の新月。
千里の外の人心、
ちちにうつろふ秋の空、
別府の雨きく手枕に
夢も結ばぬ夜。な々々
思ひはいとぞ増。井山、
積るが上に積る雪。
是ぞ真に豊かなる
年の貢と知られたる。

第十八課 左馬助秀俊

光秀、信長を弑して安土の城を攻め落し、左馬助秀俊に守らせて山崎に打ち向ひ、秀吉と戦ひて敗北せり。秀俊安土を出でて光秀を救はんぞ、京を指して進む處に、はや光秀討たれたりと聞えしかば、坂本の城に入らんと、粟津を北へ大津を指して行く所に、秀吉の先陣堀久太郎秀政に行き逢ひけり。秀俊小勢なれば打ち破られぬ。

本道は敵に塞がれつ、湖水に馬を打ち入れ泳がせければ、秀吉の軍兵とも汀に並み居て、溺れん有様を



見よ。と笑ひあへり。秀俊は白練に雲龍を狩野永徳に書かせたる羽織を着、二の谷と云ふ冑を着、大鹿毛と名けたる馬に乗り、年久しく坂本に在りて、大津より唐崎までの遠淺は能く知りたり、容易く唐崎濱に乗り上げ、一つ松の下にて馬には患合の藥を飼ひ、連

ひ來る敵を見て居たりしが、又馬に乗り坂本に入る。とき、十王堂の前にて馬より下り、手綱を以て堂に繫ぎ、矢立の硯取り出し、明智左馬助潮水を渡し、馬なり。と札に書きて、手取鬘に結び付け、坂本の城に入り、女童を刺し殺し、城に火を掛けて自害せり。二の谷の冑に羽織と黄金百兩添へて、坂本の西教寺に送りけり。

後に山中山城守長俊が孫作右衛門友俊、冑を望み乞ひて得たりしが、程經て紀伊の士宇佐美造酒助孝定が許に傳りぬ。羽織は行方を知らず、馬は無雙の

駿足にて秀吉志津が嶽の軍に此の馬に乗られしなり。

源氏物語—常山記談

第十九課 武田信玄ト上杉謙信

元龜天正ノ頃、我が國多クノ豪傑並ビ出テ各地ニ割據シ、兵ヲ練リ武ヲ講ジ互ニ攻伐ヲ事トシケリ。是ノ時ニ當リ、軍隊ノ立方オゴソカニシテ紀律正シク、兵鋒ノ勦キコト海内之ニ當ル者ナカリシハ、武田信玄ト上杉謙信ナリ。

武田信玄ハ名ヲ晴信ト云フ、沈勇ニシテ謀略ニ富

メリ。少年ノ時既ニ三百ノ寡兵ヲ以テ海野城ヲ攻メ陷シ、城將ヲ斬リタル程ノ豪傑ナリキ。

上杉謙信ハ名ヲ景虎ト云フ、長尾爲景ノ第四子ナリ。父爲景人ニ弑セラレテ後、權臣、景虎ノ二兄ヲ殺シ、其ノ政ヲ專ニシケルヲ、景虎効少ナリシカド、兵ヲ起シテ大イニ其ノ徒ヲ破リヌ。此ノ時長兄晴景敵中ニ在リテ自殺シケレバ、景虎諸將士ノ爲メニ排サレテ主トナレリ。

信玄頻リニ信濃ノ地ヲ侵略シケレバ、村上義清支フルコト能ハズ、越後ニ走リテ謙信ニ投ジキ。謙信

ハ義心厚キ人ナリシカバ之ヲ助ケテ遂ニ武田氏ト
ノ間ニ兵争ヲ起シ前後五回ノ大戰ヲナシテ互ニ勝
敗アリ。世ニ名高キ河中嶋ノ軍トハ即チ此ヲ云フ
ナリ。

是ヨリ後信玄ハ兵ヲ駿河ニ出シテ今川氏ノ諸城ヲ
攻略シ又徳川家康ト三形原ニ戦ヒテ大イニ之ヲ破
リ甲斐・信濃・飛騨・駿河・上野ノ五國ヲ其ノ所領トスル
ニ至リヌ。謙信ハ連リニ兵ヲ越中・加賀・能登ニ出シ
テ之ヲ略取シ又上杉憲政ヲ助ケテ北條氏康ヲ攻メ
向フ所當ル者ナカリキ。遂ニ憲政ト約シテ父子ト

ナリ其ノ姓上杉ヲ冒シ京師ニ入りテ將軍足利義輝
ニ謁セシニ義輝特ニ命ジテ關東ノ管領ヲラシメ己
レノ偏諱ヲ賜ヒテ名ヲ輝虎ト改メシメタリ。

信玄ハ或時遠江ニ入りテ野田城ヲ攻メシガ病ヲ
得テ旋リ後更ニ三河ニ入りシニ病再發シテ遂ニ死
セリ行年五十三ナリキ。謙信或日食スルニ方リ偶
信玄死セリト聞キ箸ヲ舍キテ太息シテ曰フヤウ「嗚
呼吾ガ好キ敵ヲ失ヘリ。世様此クノ如キ英雄男子
アラシヤ。」トテハラ／＼ト涙ヲ流シトゾ。

信玄既ニ死シテ後諸將士皆甲斐ヲ取ランコトヲ

勸メシニ、謙信ハ「我信玄ト數十戦シテ取ルコト能ハズ。今其ノ死スルヲ幸トシテ之ヲ取ラバ、何ヲ以テカ天下ニ對セン。」トテ遂ニ兵ヲ武田氏ノ地ニ用ヒザリキ。

是ノ時ニ當リ、織田信長深ク謙信ヲ恐レ、諷ミテ之ニ事ヘケルガ、謙信之ヲ快シトセズ、使ヲ信長ニ遣ハシ、書ヲ遺リテ曰ク「足下屢、畿内ノ敵ト戦ヘドモ、未ダ北人ノ技術ヲ知ラジ。請フ明春三月ヲ期シ、八州ノ兵ヲ率ヒテ西上シ、足下ト相見ン。」ト。斯クテ翌年ニ至リ、檄ヲ傳ヘテ管内八國ノ兵ヲ徵シ、自ラ將トシテ

軍ヲ發セントシケルニ、會病ニ罹リテ死セリ、行年四十九ナリキ。信長之ヲ聞キ、大ニ悦ビテ「是ヨリ天下必定ラン。」ト曰ヒシトゾ。抑、信長ガ永ク志ヲ得サリシハ、實ニ信玄、謙信ノ二豪傑、後ヲ窺ヒシニ由レリ、サレバ二人死シテ後、信長輒ク併吞ノ功ヲ遂グルヲ得タリ。是ニ由リテ見ルモ、二人ガ將略ノ勝レタルコト推シテ知ルベキナリ。

信玄ハ唯將略ニ長セルノミナラス、亦能ク治國ノ術ニ長シ、民ヲ愛スルコト子ノ如ク、節儉ヲカメ、賦稅ヲ輕クセリ。サレバ今ニ至ルマデ、其ノ地ノ民飲食

スルニ、必録録ト云ヒテ之ヲ記レリト云フ。
謙信ハ兵ヲ率フルニ紀律最モ嚴肅ナリ。其ノ隊
ヲ分クシトスルトキハ、特ニ號令ヲ下サズ、自身馬ニ
跨リ疾ク驅リテ衆中ヲ過グレバ、士卒之ニ隨ヒテ左
右シ、隊伍立ちドコロニ定リキト云フ。

第二十課 女徳

女ニ四行アリ、一ニ婦徳、二ニ婦言、三ニ婦容、四ニ婦
功、此ノ四ツハ女ノ務メ行フベキ業ナリ、婦徳トハ、心
立善キヲ云フ、心貞シク潔ク和順ナルヲ徳トス。婦

言トハ、言葉ノ善キヲ云フ、詳レルコトヲ言ハズ、言葉
ヲ擇ビテ言ヒ、似氣ナキ惡言ヲ致サズ、言フベキトキ
言ヒテ、不用ナルコトヲ言ハズ、人其ノ言フコトヲ嫌
ハサルナリ。婦容トハ、形容ノ善キヲ云フ、アチガチ
ニ飾ヲ專ニセザレドモ、女ハ容嬌カニテ雄々シカラ
ズ、装ノアデヤカニ、身持奇麗ニ潔ク、衣服モ垢ヅキ汚
ナキ是レ婦容ナリ。婦功トハ女ノ務ムベキ業ナリ、
縫物ヲシ、紡ミ績ギヲシ、衣服ヲ整ヘテ、専ラ務ムベキ
業ヲ事トシ、戯レ遊ビ笑フコトヲ好マズ、食物飲物ヲ
潔クシテ舅姑、夫、賓客ニ進ムル是レ皆婦功ナリ。此

ノ四ツハ女人ノ職分ナリ、務メスンバアルヘカラズ。
心ヲ用ヒテ務メナバ、誰モナルヘキ業ナリ、怠リ荒モ
テ其ノ職分ヲ空クスヘカラズ。

貝原益軒一室子訓。

第二十一課 社會

人ハ一人一箇單獨ニ此ノ世ニ居ル者ニ非ズ、必相
聚リテ群ヲ爲ス者ナリ。茲ニ一人アレバ、必其ノ父
母アリ、或ハ其ノ妻子アリ、或ハ其ノ兄弟アリ、或ハ其
ノ僕婢アリテ、其ノ一家族ヲ成ス。而シテ此處ニ一
家族アレバ、彼處ニモ亦一家族アリ、衆家族相集リテ

村ヲ成シ、町ヲ成シ、衆町村相集リテ、郡ヲ成シ、國ヲ成
ス。此ノ國ノ中ニ住居スル人ハ、皆一定ノ政府ヲ戴
キ、一定ノ法律ヲ守リ、一定ノ言語ヲ語り、一定ノ風俗
ニ従ヒ、互ニ相倚リ相須キ、其ノ目的ヲ均クシ、其ノ利
害ヲ同クシ、幸福相賀シ、艱難相憐ム。斯クノ如ク人
類ノ相聚リタル團體ヲ社會ト云フ。故ニ社會ハ一
人一家一村一町一郡一國ノ集合體ニシテ、恰モ卒伍
集リテ小隊ヲ成シ、小隊集リテ聯隊ヲ成シ、聯隊集リ
テ旅團ヲ成スガ如シ。其ノ相互ノ間ニ分離スベカ
ラサル關係アリテ、勞ヲ分チ力ヲ合ハセ、相扶ケ相待

チテ、共ニ存在スル者ナリ。

社會ハ衆多ノ人ノ集合ナルガ故ニ、其ノ中ニ在ル一人ノ善惡ハ、必他ノ諸人ニ影響シ、他ノ諸人ノ善惡ハ、必重チテ一人ノ身ニ反響スベシ。故ニ他人ノ幸福ヲ助成スルハ、自ラ幸福ヲ享クルノ道ニシテ、自ラ善ヲ爲スハ、人ヲシテ善ニ導ハシムルノ道ナリ。例ヘバ一家族中ニテ、一人病ニ惱ミ、或ハ厄難ニ逢ヘバ一家爲メニ困難シ、家族中、一人善良ニシテ能ク事ニ堪フレバ、一家爲メニ幸福ヲ享クルガ如ク、社會中ニモ一人不良ノ者アレバ、衆人皆其ノ害ヲ蒙リ、一人善

者アレバ、衆人皆其ノ益ヲ受ク。サレバ人々能ク此ノ理ヲ考ヘ、自他共ニ心ヲ合ハセ、勞ヲ分チ、調和親睦シテ以テ社會ノ進歩ヲ計ルベシ。社會進歩スレバ、一國隆盛ヲ致シ、隨ヒテ各人モ亦幸福ヲ享クルナリ。

第二十二課 社會に對する義務

古人云へるあり曰く「己れの欲せざる所之れを人に施すこと勿れ」と又曰く「己れの欲する所は之を人に施せ」と是れ先哲が教示せられたる金言にして、吾人に善を行はしめん爲の指針なり。凡、他人に對す

る義務の種類、數多ありと雖も、之れを實行するの標準は皆此の金言に取らざる可からず。

今此の格言に従ひて社會に對する義務を考ふるときは、第一人の生命を害す可からず、却りて人の生命を救ふ可し。第二人の財産を侵す可からず、却りて人の窮困を助く可し。第三人の名譽を傷く可からず、却りて人の名譽を成す可しと云ふ事是なり。而して此の三個の義務の中にありて、人の生命を害す可からず、人の財産を侵す可からず、人の名譽を傷く可からずと云ふは、何れも第一の格言に基くもの

にて、決して爲す可からざるの義務あり、之を正義の義務と云ふ。又人の生命を救ふ可し、人の窮困を助く可し、人の名譽を成す可しと云ふは、何れも第二の格言に基くものにて、之を爲すと否とは人々の撰擇にあるものなり、之を慈惠の義務と云ふ。

高等小學
新體讀本卷五終

社會科

明治廿七年九月廿六日印
全 年九月廿九日發
全 年十一月三日訂正再版印刷
全 年十一月六日發

行	刷
定	價
一卷金拾三錢	二卷金拾四錢
三卷金拾五錢	四卷金拾五錢
五卷金拾六錢	六卷金拾七錢
七卷金拾八錢	八卷金拾八錢

金港堂書籍株式會社編輯所編輯

發行所
印刷者
金港堂書籍株式會社

代表者
原 亮三郎

版權
所有

賣場所

大坂市東區南本町四丁目
金 港 堂
官城縣仙臺市國分町五丁目
金 港 堂

明治27年

2

上巻